「あつぎアカデミックプロジェクト演習」の授業実践の成果と課題
―大学版の総合学習の実践と教職課程における総合学習の指導の留意点―

滝沢利直[*1]　田中康二郎[*2]　小沢一仁[*3]
木村瑞生[*4]　重光由加[*5]　松本里香[*6]　植野義明[*7]

Outcomes and issues of practical lesson practice in “Atsugi Academic Project” : educational activity of integrated learning class in University and points of student guidance about integrated learning class in teacher-training course.

Toshinao Takizawa[*1] Kojiro Tanaka[*2] Kazuhito Ozawa[*3]

Mizuo Kimura[*4] Yuka Shigemitu[*5] Rika Matumoto[*6] Yoshiaki Ueno[*7]

The aim of the course of Atsugi Academic Project is to give students opportunities to stand on a view point of both globalism and localism.

Faculty members who teach this course contribute to this paper and discuss project work at university level and clarify how the teachers organize their project based course in teacher training courses.

１．あつぎアカデミックプロジェクト演習の設置

現代社会は、グローバリズムが強調されながらも、近代社会から続く都会対田舎の対立軸がそのまま根底において継続し、グローバリズム対ローカリズムの対立軸は潜在的に存在している。その中で、学生は現代社会に出て行く中でいかに生きるかを迫られている。

対立軸の一方のグローバリズムは、理想的なコスモポリタン的な市民主義の装いはしているにもかかわらず、一皮むけばアメリカ中心主義であり、東京中心主義であり、その根本的な理念はねじれているのではないのか。一方のローカリズムにおいても、村社会は伝統として維持されつつも、ネット等で情報は共有され、大規模商業施設によって都会と同様の商品、雰囲気を味わえるようになり、地方で生きること自体も変容しているのではないか。この両者の対立軸の中で、「どこで、いかに生きるか」という問題は、社会に出て行く学生だけでなく、大人にとっても重要な問題となっている。

文部科学省の提唱する学校教育において、グローバリズムが重視されるが、その中でも、ローカリズムを考えることなくして、グローバリズムを理解することもできないだろう。そこで、グローバリズムと対比しながら、本学の所在地である厚木を起点として、ローカリズムを考えていき、それぞれの学生が、「どこで、いかに生きるか」という問題を根底に持ちながら、現代社会におけるテーマを追究していくきっかけをもつ授業を行いたい。

本授業「あつぎアカデミックプロジェクト演習」の意義は、「あつぎ」をグローバリズム（汎地球主義：国家の枠をこえて「一つの世界」という視点に立とうという考え方）とローカリズム（地域主義）の統合の場としてそれぞれが独自な観点から主体的な学びを行うこととする。

なお、テーマ設定における留意点としては、グローバリズムとローカリズムの対立軸の中で、世界的に問題となっている事象が厚木という一地方都市において関連する諸問題がいかに現われているのかを必ず言及する。

本論の目的は、第一に、大学版「総合学習」である「あつぎアカデミックプロジェクト演習」の成果と課題を検討することである。第二に、教職課程における総合学習の指導の留意点について明らかにすることである。

本論の構成は、まず、7 名の教員で担当した 2016 年度の授業実践を示す。授業実践の示し方は、基本的には、１）第 1 回から第 15 回までの授業記録、２）学生による研究テーマ、３）反省の３つの内容を提示する（中には異なる記載もあるが、担当教員の自主性に任せることとした）。次に、総合学習での学びを児童期・青年期前期・中期・後期における発達段階から考察した。そして、小中高大という各学校種での指導の留意点を検討した。最後に、総合学習の意義と今後の課題について考察した。

*1, 4, 5, 6 東京工芸大学基礎教育研究センター教授　*2 東京工芸大学芸術学部基礎教育教授　*3, 7 東京工芸大学基礎教育研究センター准教授
2017 年 3 月 27 日 受理

２．各担当教員における教育実践

１．滝沢担当クラスの教育実践

（１）授業の展開（水・２時限目）

第１回　ガイダンスとワークシート作成の予告

・全体の内容と日程

・それぞれの教員の専門分野紹介と昨年度までの教養演習・総合演習での学生テーマの紹介

・学生から暫定的な興味ある分野や問題意識を訊ね、それを紹介してもらう。

・次回から学生に記憶媒体を持参させ、随時に記入してこれを活用するように予告した。

第 2 回　ワークシートに従ってグループ活動の実施と担当教員の配属決定

第 3 回　各グループにおける発表会と担当教員の最終配属決定（松本里香氏と同時開講）

第４回　厚木市郷土資料館の見学・・・諸資料や諸陳列物、遺産の見学

第５回　この回から各クラスごとの授業実施・・・各自の研究動機を主とした発表を行った。

○第 6～12 回・・・各自の研究経過報告

第 13 回・・・プレゼンテーションのリハーサル

○第 14～15 回・・・松本・滝沢合同のプレゼンテーション

＊司会係・時計係を決めて進行。

＊PPT（Power Point）の活用による発表。

＊一人につき７分発表し約３分から５分の質疑応答

（２）学生たちの研究テーマと成果

Ｇ１：「地震と本厚木」・・・厚木市役所に取材に行き、厚木市地域防災計画を調査した。また、国、地方公共団体及びその他公共的機関の役割分担を調査した。更には、地域と本学の防災計画も調査した。

Ｇ２：「厚木基地について」・・・厚木基地の成立の歴史的研究をした。また、諸外国、特に北東アジア地域の防衛政策の実際も調べた。更には沖縄の米軍基地の歴史も明らかにして、今後の日本の防衛の在り方を追究者なりに提案した。

Ｇ３：「厚木市のキリスト教会」・・・市内の或る教会に赴き、礼拝の様子や礼拝者の年齢層やその人々が暮らす地域の日常を聞き取りしてきた。今日の日本に暮らす人々にキリスト教会の役割や意義はあるのかどうか、またその知らせ方について追究者なりの見解を提示した。

（３）反省

＊今年度から「あつぎ」というローカルな観点をもつことを特色とした。グローバルへの関心と「あつぎ」というローカルに多少とも軸足を置いて模索した研究が多かった。

＊授業者は、厚木を理解し追究するため多様な視点を参考までに提示した。これが取捨選択の吟味に際してヒントになった。しかし、「あつぎ」というこの枠を外すことによる多様なテーマ設定もあり得ることもまた確かだ。グローバルとローカルの関係を相補的になるように指導の工夫をしていく必要がある。

＊第６回―第１２回について

最初から研究動機をしっかりと抱いている人とそうでない人との差が目立った。また、確実に研究の成果を積み上げていく過程を見いだせた人とそうでない人がいた。受講者のやる気や興味・関心も重要だが、それを喚起していく授業者の介入の工夫や示唆の工夫も求められていた。それを反省している。

＊来年度も今年同様に最後のプレゼンテーションの時間を十分に確保してあげたい。プレゼンテーションという経験は学生にとってとても意義あるものであると思われる。

＊授業者が認識していない事柄、不明な事柄に関して受講者の追究により明らかになったことがあった。改めて「あつぎ」という場所の新たな理解を学生と共にした。気づきや知識を共有できたことも授業者には意義があった。

２．　田中担当クラスの教育実践

（１）授業の展開

第１回・ガイダンスとワークシートの予告

・参考資料の提示及び配付：【2015 年度「教養演習」火曜 1 時限履修生研究テーマ一覧と概要】：中学校社会科副読本、小学校総合の時間資料（厚木市教育委員会発行）

第２回・ワークシートに従ってグループ活動による調査

第３回・第２回での調査結果のグループ発表

・各グループ及び個人の研究テーマ選定

・各履修生の配属決定　グループ 1～5

第４回・厚木市郷土資料館見学：現地集合現地解散

第５回・各グループの研究テーマを検討し、大まかな調査方針と各自の担当を決定し発表

第６回~第 12 回

・PC022 教室において、調査を進める。

第９回：中間発表

各グループの研究テーマ

G.1　：「厚木市の医療機関と需要」

G.2　：「今もなお変わり続ける厚木市」

G.3　：「建築から学ぶ芸術」

G.4　：「厚木市ホームページ（HP）改善案」

G.5　：「保育園の抱える問題」

第 13 回・プレゼンテーションのルハーサル

第 14 回～15 回

・プレゼンテーション：各グループ 6 分から 8 分　PPT 使用

（２）研究テーマ

G.1：「厚木市の医療機関と需要」

厚木市の医療施設と介護施設の需要数を調査し、市の人口割合や動態と各施設数から厚木市における施設の活用状況を見た。人口の各年齢グループはどのように変化しているのか、2010 年の統計から調査し、2040 年までを推計した。その上で厚木市の医療施設及び高齢者用の施設の需要にどのような変化や状況が見られるかを推測し今後の施策への提言を行った。

G.2：「今もなお変わり続ける厚木市」

厚木市の現在の環境（人口、地理：自然環境、面積等）を確認し、厚木市民にとって暮らしやすい環境であるのか検証した。神奈川県の中央に位置し、かなり広い面積をもち、多くの山や河川があり自然に恵まれているようにみえるが、その自然は本来の自然林が少なく、人の手が入った緑地（ゴルフ場や公園等）が大部分であること、また市街地では多くのマンションが建設されているため本来の自然環境はすでに失われていることが見て取れる。しかしながら厚木市は働く場所が多いので人口は増える傾向にあり、現状の自然を減らさない努力をする必要がある。

G.3：「建築から学ぶ芸術」

厚木市の歴史的建造物として「飯山観音」を調査し、その歴史と本堂建築について着目し、考察した。飯山観音に存在する主な文化財として「銅鐘、観音堂、イヌマキ、厨子」が挙げられるがその他の重要な文化財として金剛力士像などがあるが保存状態はあまり良くないことが確認できる。また観音堂の屋根は本来の茅葺きでは無く、鉄板葺きとなっており歴史的な価値が多少損なわれている。

G.4：「厚木市ホームページ（HP）改善案」

厚木市の現在のホームページが使いにくいことから、その改善案を提案した。スマートフォン用とパソコン用があるがそのスマートフォン版のレイアウトが見づらい、メニューアイコンが多すぎる、キーワード検索の位置がわかりにくい等の欠点がある。そのメニューの整理が必要であり、情報の優先順位を決める必要があると感じ、改善案を試作し、提案した。

G.5：「保育園の抱える問題」

厚木市のみの問題では無く、同様に日本全体が共通して抱えている問題として待機児童問題と保育園幼稚園の現状について調査した。これらについて考えることは、住民、行政、政治、企業などありとあらゆる問題が相関していると感じている。これから子どもに関わる人も関わらない人も自分にできることは何かを一瞬立ち止まって相手を思いやることがこの問題を少しでも改善すると考えている。

（３）反省

今年度は履修生がテーマを検討する際、そのテーマが割合近い内容のもの同士でグループを組み再度テーマを検討し、調査に入った。共通テーマとして「あつぎ」という視点を持った主題を想定し、各履修生が具体的な項目を絞って調査を進めた。その過程で元々各自が想像した状況とはかなり異なる調査結果が出てきたので、その時点で考察の方向性を修正して再度調査し、資料からどのようなことが読み取れるか検討した。調査に関しては、関連する行政機関や公共機関が発表しているデータを基に比較検討しながら推論を立て、さらに必要な資料を検索するという形で進めた。多くの資料から何を読み取るかという部分が学習として最も重要であり、その点に関してはおおむね良好な学習態度であったと思われる。

またプレゼンテーションに際して、各グループは PPT をうまく使用しており、考察内容の理解に役立っていた。

全体の反省点としては、グループで調査や考察を行う際、2 名の場合は比較的スムーズに打ち合わせができていたように見受けられるが、3 名の場合はテーマのイメージや調査の方向性や具体的な事項を決定する際に、互いへの多少の遠慮があるせいか各自の意見が調整しづらいように感じる。今後は共同で調査発表する場合は 2 名を限度とすることとしたい。

３．重光担当クラスの教育実践

（１）授業の展開

第 1 回　ガイダンスとワークシートによるタスクの予告

教員の研究内容の紹介・あつぎアカデミックプロジェクト演習についてのガイダンス。

第 2 回　ワークシートに従ったグループ活動

事前に配布された厚木に関する調査項目に関して、グループを作り、図書館のアクティブ・ラーニング・ルームでテーマを決め、調査。

第 3 回　各グループにおける発表会と担当教員の最終配属決定

学生が調べた主なテーマは、厚木市の神社、厚木所の言語変種、厚木市の教育環境であった。

第 4 回　厚木市郷土資料館の見学

現地集合現地解散で見学を行った。資料館が小規模であること、また、２限の授業のため大学への移動時間を確保しなければならないため、実際は 1 時間程度の見学となった。

第 5～12 回　各自のプロジェクトに従っての調査実施。参考文献発表、参考文献リスト提出、リサーチ・クエスチョンを何にするか個人面談、中間発表、レポート中間提出、合同発表会直前予行演習など、各自のプロジェクトの進捗に合わせて行った部分と、クラス全員で行った部分がある。特に、引用の書き方は、剽窃の問題と関連づけ繰り返し指導を行った。プレゼンテーション法については立教大学の大学教育開発・支援センターが発行している、「Master of Writing[1)]」、「Master of Presentation[2)]」を参考にさせ、引用の書き方、参考文献は徹底させた。

第 14～15 回　田中・植野・重光クラス合同のプレゼンテーション会を実施した。総勢で３０名ほどいたので、二回にわけて実施。また、第１５回目はレポートの提出日とした。

（２）重光担当クラスのテーマ

歴史、社会に興味を持つ学生が集まった。テーマと概要は以下の通りである。

・「厚木市の伝統芸能について」（相模国里神楽、飯山白龍太鼓、白龍の舞の歴史と現在の状況）
・「駅から見つめる厚木」（厚木駅・本厚木駅・海老名駅の関係と町の発展）
・「とん漬けが名産となった理由」（横浜港開港とのかかわり）
・「厚木市の観光客誘致」（厚木市にはいろいろな観光名所があるにもかかわらず知名度がほとんどない原因を、厚木の発展とともに考察）
・「厚木の鮎について」（厚木は鮎を名産としているが、背景・実態を調査）
・「厚木市の戦国時代」（厚木は戦国時代はどのような役割を果たしたのかを考察）
・「普通学級と特別学級について」（厚木に特化した調査ではないが、多様性の問題をとりあげている）

（３）授業の今後の課題

本節では、本年度の授業実践の中から今後の課題について考察する。

「あつぎ」というローカルな観点をもつことを導入した初年度であったため、多くの課題があげられる。まず、以前の教養演習では、学生の興味を広く対象としたが、「あつぎ」の観点を入れたことで、学生の取り組みの範囲を狭めてしまった可能性が大きい。教員も学生も市外、県外から通っているため、どちらも厚木に関する事前知識があるとは言えない。そのため、厚木の社会に浸潤する問題点を浮き彫りにするなど深い取り組みまではできなかった。個性的な視点から厚木を捉えた学生もいたが、そこにたどり着くまでに資料にあたる時間をかなりとられてしまったといえよう。

次に、「あつぎ」のローカルな観点の導入の着地点が、不明瞭であった。域学連携などを視野に入れる授業とするのか、入れるならどの程度まで行うのか、積極的な教員に負担をかけてしまうのか、授業の着地点が教員間で共有されていなかったため、今後は、教員間での調整と共有が必要であろう。

最後に、前述したように厚木に関する一次資料の少なさがあげられる。主に、歴史・地理の調査の学生が集まったが、県の中心地ではなく、目立った産業がなく、ベッドタウンとして成長した厚木に関しては資料が少ない。そのため、インターネットで得られる資料が参照文献の中心となってしまった。今後、どの程度の域学連携をしていくかという授業方針にもかかわるが、神奈川県立博物館などの資料などのアクセスも必要と考える。

教養演習のときの学生の取り組みと比較すると、資料が少ないなど参考文献にあたる段階で躓いてテーマが決められない学生も多かった。その部分に時間をとられてしまい、考察が雑な学生やレポート執筆の精度が十分でない学生もいた。教員側がヒントを出すこともできるが、大学生の自律学習ととらえると望ましいことではない。教職履修者の科目であり、次世代を育む任務をめざす学生を対象にしていることを考慮するならば、授業の手法など反省することは多い。

新年度は、以上の問題点の解決のため、教員間での問題点共有、授業の特色の再確認などが必要であろう。

参考文献

1) 立教大学大学教育開発・支援センター (2012) Master of Writing 立教大学大学教育開発・支援センター出版
2) 立教大学大学教育開発・支援センター （2016） Master of Presentation. 立教大学大学教育開発・支援センター出版

４．木村担当クラスの教育実践

（１）授業の展開

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　グループ分け（テーマ別のグループ分け）
第 3 回　ＰＣを借用しテーマにつて調査（発表者２名）
第 4 回　厚木市資料館の見学
第 5 回　発表（16 名）
第 6 回　新たなテーマの設定（取り上げた１～３つのテーマについての説明）
第 7 回　グループ分け（テーマを基に２グループに分ける）、調査方法の検討
第 8 回　調査方法についての発表
第 9 回　調査方法についての発表
第 10 回　調査
第 11 回　調査
第 12 回　プレゼン用 PPT の作成
第 13 回　プレゼン用 PPT の作成
第 14 回　プレゼンテーション（全体）
第 15 回　プレゼンテーション（全体）

（２）研究テーマ

「茶道から見る日本の精神」
「プロ野球選手はどのような方法でＭＬＢ球団に入団するのか」
「野球の各ポジションについて」
「地区公園について」
「オリンピック種目に野球がない理由」
「無印良品について」
「鎌倉と宣伝の効果について」
「宝塚歌劇団が１００年以上続く理由」
「スタジオジブリと鈴木敏夫について」

（３）反省

本授業は、後述する調査Ｉと調査Ⅱにおいて、それぞれテーマを設定し調査し、その結果をまとめて発表するまで

の一連の過程を課題として遂行することを受講者にも課すことによる学生の探求心、思考力、コミュニケーション力、プレゼンテーション力の涵養を目的としている。

まず、調査Ⅰでは、本学厚木キャンパスの所在地である厚木市に関連したテーマを調査の対象とする。テーマ設定に際して学生にワークシートを配布し、例として 13 項目（1. 自然環境・地域、2. 人口、3. 産業、4. 学校教育、5. 体育・スポーツ、6. 芸術、7. 国際交流、8. 教科教育、9. 福祉、10. 病院、11. 商業施設、12. 宗教施設、13. 歴史）を紹介し、学生がテーマを決定する参考資料とした。

第１回から５回の調査・発表は、厚木資料館の見学（第 4 回）があったため、第 3 回（２名）と第 5 回（１６名）の計２回の授業内に実施した。

以下の受講者が決定したテーマを示す。

・あゆコロちゃんの実態
・厚木の誕生
・厚木市との連携都市
・厚木市の病院
・あつぎハム（世界売り上げ３位）
・厚木市の植物の外来種
・厚木市の環境問題対策
・厚木市と自転車（ヒルクライム）
・厚木市のスポーツ事情
・厚木市の文化財
・厚木市の子育て支援
・厚木市の人口の推移
・厚木市の産業
・厚木市の災害対応力調査

次に、調査Ⅱでは厚木市と関連したテーマをさらに追及するテーマで進めるか、また、全く異なるテーマで調査を開始するかで迷ったが、学生の意見も参考にし、最終的にどちらの方向でテーマを決定するかは学生に委ねることにした。結局、厚木市関連のテーマを取り上げた学生は、1 名もおらず新たなテーマでの調査を開始することになった。これは、履修者と厚木市との強い関係性は、キャンパスが厚木にあるという以外にはなく、その結果、厚木市関連のテーマに広く興味を示さない傾向を示すこととなったと推測される。特に、芸術学部の学生は、３年以降中野キャンパスに通うことになるので、４年間厚木キャンパスに通う工学部の学生に比べて厚木市に対する意識は薄くなるのではないかと思われる。

昨年度まで実施されてきた「教養演習/総合演習」に代わり、今年度は「あつぎアカデミックプロジェクト演習/総合演習」という科目として授業が展開されることになった。したがって、調査Ⅰに示したように授業の内容にも厚木市関連のテーマの調査・発表が加わり、さらに調査Ⅱについて新たにテーマを設定し調査・発表をしなければならないことになった。このように、課題が二重に課せられることで、議論を重ねる時間的余裕が損なわれ、まとめのためのスキル指導に授業が偏重せざるを得なくなった点は否めない。つまり、テーマについて深く考えることを疎かにしていしまったようだ。

調査Ⅰでも調査Ⅱでも学生が決定したテーマについてまとめるスキルを身につけることについて否定はしないが、なぜそのテーマ選んだのか学生に問いただすと「興味があったから、好きだから」という返事がほとんどである。なぜ「興味をもったのか」について学生一人ひとりと議論することで、学生が「興味をもつ」という意識の中に潜んでいた自身の考えに気づくことがよくある。この「気づき」が調査の動機付けとして作用し、課題遂行の方向性を定め、作業意欲を高めることにつながると思うのであるが、残念なことに今年度はその時間が足りない授業展開になってしまった。

次年度は、できれば厚木関連のテーマ(調査Ⅰ)から継続性のあるようなテーマ（調査Ⅱ）を学生に設定させるようにし、学生が選んだテーマについて議論をし、深く考える時間を設けるように工夫したい。

他の反省点として、成績の表に示されているようにすべての学生の欠席日数が多い。表にはないが遅刻数も多い。教員免許の取得を目指している履修者が多いことを考えると、時間厳守の態度について厳格に対処しなければならないと考えている。

５．松本担当クラスの教育実践

（１）授業の展開

第 1 回　ガイダンス、暫定テーマ検討
第 2 回　暫定テーマ　グループ作業
第 3 回　暫定テーマ　グループ発表
第 4 回　厚木市郷土資料館見学
第 5 回　自己紹介、テーマ案（分野）発表
第 6 回　テーマ検討・決定　発表
第 7 回　情報収集作業
第 8 回　情報収集作業
第 9 回　情報収集・まとめ作業
第 10 回　進捗報告
第 11 回　グループ内予備発表（1）
第 12 回　グループ内予備発表（2）
第 13 回　発表資料修正等
第 14 回　[合同] 発表会（1）
第 15 回　[合同] 発表会（2）

（２）研究テーマ

「厚木市における環境問題～特に飯山地域における悪臭について～」
「水の確保」
「川の汚染問題と対策」
「鮎と厚木」
「日本の地震と厚木の地形」
「厚木市と豚」
「厚木市の産業の発展と絶滅危惧種」
「厚木の温泉」

「厚木市の出土品」

（3）反省

①授業の雰囲気

昨年度までの前身科目である教養演習において、学生間での議論を深める方向に導くことに難しさを感じた。よって、今回は議論に入る前に、学生間の交流を図ることを試みた。実際には、グループ授業の初回にテーマ案発表とともに自己紹介をお願いした。しかし、今回の受講生は既に友人関係にあるものが多かったため、照れがあり、意図した効果は得られなかった。反対に、友人間での慣れ合いのような雰囲気が生じてしまい、緊張感のない授業となってしまった。

②運営・指導

昨年度までの教養演習の授業期間中盤では、各学生の進捗報告や相談・議論が一通り終了した後、残った時間の使用法方に苦慮した。よって、今年度は学生が PC を持参することを許可し、授業時間内でも作業が進められる環境とした。これにより、授業の残時間の有効活用ができるメリットもあったが、反対に、授業時間しか作業を行わない学生が多くなり、作業進行が大きく遅れた。その結果、最終的なプレゼンテーションおよびレポートも浅い内容が多かった。学生は順調に情報収集作業を進めるが、その後の分析や考察に進めずに終わってしまった。今回は研究における分析や考察の意味や重要性を学生に理解してもらうことができなかったので、次年度はこの点を強化し、単なる情報収集と分析は異なることを理解させたい。

また、今年度は PC 中心の作業となってしまい、情報収集をインターネットに依存する傾向が強くなり、参考文献として図書を利用しない学生も生じてしまった。学生には図書による情報収集方法も身に付けてほしいので、次年度は最低でも 1 冊の図書を利用するように指導したい。

③課題

毎回の授業運営、特に授業期間中盤の 5〜6 月の授業運営が難しいと感じている。例えば、学生に順番に進捗状況を発表（報告）させる場合、作業をさぼっている授業態度が消極的な学生は何も発表できない。さらに、他人の課題に関心を示さない学生も多く、教員と発表学生がやり取りしている間、他の学生は自分の作業を進めてしまっている。そのため、クラス全体での議論が成立しない。よって、他学生の研究に関しても強制的に関与するような仕組み（工夫）を考えているが、今のところ良い方法が見いだせていない。

6．植野担当クラスの教育実践

（1）今年度の特徴

本年度は 10 名の学生のうち全員が教職課程履修者であり、学校内でのいじめの問題、塾での学習と学力の関係などが共通の話題としての役割を果たした。また、10 名のうちの 8 名が生命環境化学科の学生であったため、理科の教職免許の取得希望者が多数を占め、そのため、厚木市の自然、社会、文化の中で自然に対する興味を示す学生が多かったことが特徴として挙げられよう。

教室として、図書館３階のセミナー室を利用することができた。それらのセミナー室は今年からアクティブラーニングルームと名前を変え、自由に組み合わせを変更できる机、プロジェクターが完備され、貸し出し用のノートパソコンも学生証で借りられる。少人数のグループでパソコンやモバイルパッドを使った授業には非常に恵まれた環境である。

（2）テーマの決め方について考える

学生たちがはじめにやってみようと思ったテーマを列挙すると、次のようになった。

厚木の歴史、コンビニエンスストアの数、現代の子どもたちと自然、理科離れ、厚木の自然環境について、

理科離れ、厚木の生き物の生態、厚木の自然（動物とか）、数学と遊び、スマートフォンの問題と教育、理科離れ、アイデンティティ、Line 問題、厚木の子どもの人口、厚木市の公園の数、親と子ども、厚木の道は混んでいる

授業担当者は、この「教養演習」を長年にわたって担当してきたのだが、毎年、学生にとって自分のテーマを決めることがなかなか難しいと感じている。

今年度から科目名に「あつぎ」という言葉が入り、「あつぎアカデミックプロジェクト演習」になったが、このことによって、学生にとってテーマを決めることが容易になったのだろうか。

まず、いえることは、上のテーマの案を見てもわかるように、科目名に「あつぎ」が入ったことによって、学生の中に厚木市に関係することをテーマにしようとする意識が働いたということである。

上記のテーマの中には、なかなか面白そうな研究に発展しそうなものもあるが、厚木に関係のあるテーマという意識だけで選んだテーマには、共通する弱点があるように思われる。たとえば、ある学生が「厚木の子どもの人口」というテーマを選んだとした場合、それを調べるのは学生にとっては難しいことがわかった。実際、「厚木の子どもの人口」という検索語で検索すると、多くの人たちが検索するページが目立ったところに現れ、何度検索しても同じような情報（つまり、過去 3 年間程度の厚木市の子どもの人口）が繰り返し出てくる。調査する側に厚木の子どもの人口の何を調べようとするのかの意識がないと、それ以上は進めない。

たとえば、少子化が本当に進んでいるのかを調べたいなら、もっと過去に遡って経年変化を調べる必要があるし、厚木市の人口が全国レベルの平均と比べてどうなのかを調べる必要も出てくるかもしれない。学校設置者の立場からは、学校種別の生徒数を調べることに意味があるかもしれないが、もしそうではなければ、統計が学校種別に集計されていても、その集計方法には意味がないかもしれない。

（3）情報収集力とテーマ設定能力との関係

学生は、単に、「厚木の子どもの人口」という検索語で検索するとどんなデータが出てくるかを調べることだけでは研究のテーマとはならない。なぜ、そのようなデータが出てくるのかを理解するためには、インターネットの検索エンジンの仕組みを知らなければならないだろう。

また、学生の主な情報源がインターネットだけであることも困難の原因ではないかと思われた。最近の学生は本を読まなくなったと言われて久しいが、インターネットは、自分の興味を満たしてくれる本に出合うための手段として活用することもできるはずである。読解力の基礎の上に初めて、論理的思考力や文章表現力が築かれるのではないだろうか。

結局、自分のテーマをもち、それについて調べるために、いろいろな検索語で検索してみる作業が必要になるのであって、検索語はテーマについて調べるための手段であって、テーマそのものではない。もちろん、集まったデータから逆にそれらを総括するテーマの下にレポートをまとめるという方法もあるだろう。

このように考えると、「～について調べる」と決めた段階では、テーマはまだ単語でしかない。テーマに論理的な構造をもたせること、あるいは、テーマを文の形で述べられるレベルに到達することがこの演習を実りあるものとするための目標になるだろう。その際、「あつぎ」というキーワードは思考の枠を狭める制限とするのではなく、いろいろな概念を結びつけ、発想を広げる「触媒」として働くのが理想的であろう。

（4）文章力について

文章を書くということは、読者を論理的に説得することであるから、論理力が必要になる。そのためには、まず、高校までに論理的な文章を読んで、内容を理解したという体験が多くなくてはならないと考えるのは当然のことであろう。住宅の家賃と主な駅からの交通機関の関係について調べたレポートがあった。その学生は下宿を探しているということで、生活の必要と結びついた研究であった。しかし、住宅情報を提供するサービスが発達している今日では、大量のデータが簡単に手に入る。それを表計算ソフトウェアで処理すれば、相関係数を求めたり、再帰直線を簡単にできる。

そのレポートの問題は、文章がないことだった。大量の生データ（データシート）をそのままプリントアウトしたものもレポートしては受け取れない。データは正確でも、データのままでは情報にすぎない。数表や図を効果的に挿入することは論文の価値を高めるが、データだけではレポートにならない。この学生も 4 年生になれば卒業論文を書くのだろう。その時に、「あつぎアカデミックプロジェクト演習」で習得したことを思い出してほしい。

（5）教職課程の学生として見たときの今年の学生の評価

全員が教職課程の学生であるにも関わらず、大幅な遅刻や無断欠席が非常に多かったことも今年の特徴であった。もし、これが教育実習ならば、単位は絶対に取れないだろうと思われた。教職課程の科目では、どの科目も遅刻、欠席には厳しく対処しているはずであるが、これはいったいどうしたことだろうか。

また、ある学科の学生が多数派を占めたことから、実験レポートなど、その学科の科目の話を授業中に始める学生が多かった。このようなことも教職課程の学生には似つかわしくなく思われた。もし、教師をめざすのであれば、授業中の私語は授業の進行の妨げになることは知っているはずである。

授業では、例年テーマがなかなか決まらないので、何回かブレーンストーミングを行った。ところが、学生の中にはブレーンストーミングの意味が分からず、単なる雑談会だと思っていると思われるものが多かった。また、人前で自分の意見を述べることに慣れていない学生も多くいた。このようなことは、自分が将来教師となったときに、授業という時間的枠組み、クラスという社会的枠組みをどのように組織するかという観点で考えればすぐにわかることではないだろうか。

また、自由討論の中で、塾に行くと学力が上がると考えている学生が多数を占めていたことも意外であった。それは、多くの現場教師がもっている意見と逆行しているからである。授業で行っている活動の意味を理解できず、結果的に参加できない学生や、間違った方向にクラスを扇動する学生がいたことは、大幅な遅刻をする学生が多かったことに関連して起こっている現象であるように思われた。

以上、いろいろ述べてきたが、この授業は参加する学生による変動が激しい。また、各自の教育観や、教職課程を履修していることについてどれだけ深く考えているかが結果に強く影響するように思われる。授業全体としての目標は立てにくく、それぞれの学生が自分の欠けている部分についてよく自省して、それぞれの目標を設定させるように導いた方がよいかもしれない。最後に、このことにも関連して、成績の評価の方法について、学生がどのように考えていたかということについて考えてみたい。

（6）授業の目的と評価方法

この報告では、自分のテーマをもつということを中心に述べてきたつもりであるが、まだまだ述べ方が不十分であるように感じる。

まず、日々の生活の中で自分のテーマをもつことが基本にあって、そこから調査、研究の活動が始まり、それらの活動を前に進めるための手段として書籍やデータがあり、また、ブレーンストーミングを行うクラスという仲間がいる。そして、成果が出たら、それを人に聞いてもらうことで、活動を振り返り、さらに内容を深めたり、表現力を磨くことができる。そのように考えると、この授業は一連の関連する活動の有機的な複合体であって、その動機は一つに絞ることができるのではないか。この中で動機となるテーマを見つけることが核になるのであって、それがその後

の自分のすべての活動の中心となる。そして、最後はプレゼンテーションやレポート執筆という情報発信を体験することで一連の活動の締めくくりとなるのである。つまり、この科目は、卒論に先行するプレ卒論であるといってもよいのではないか。

授業担当者としては、よく学生に、この科目はトライアスロンのような科目であるということが多いが、その意味が学生によく理解されていないように思われる。成績評価の方法は初回のガイダンスでも説明し、その後も何度も説明するが、平常点、プレゼンテーション、レポートというふうに項目ごとに評価して合計点で成績をつけるというのは合理的なように見えて、実は授業の目標が分散してしまう恐れがあることにもっと目を向けてもよいのではないだろうか。トライアスロンのようなという比喩は、分裂したバラバラの観点で評価するという意味では、もちろん、ない。結局、この授業の目標が何であるのかと考えるとき、三項目の算術的な和であるという答えは、意味論的に不適合であるように思われる。それは、自然科学ではよくある「意味のない数値化」に陥ってはいないだろうか。

次年度も同じ評価方法を取るとしても、一つの授業としての目標が、上記の三項目の足し算で計算できるとする根拠は何なのかということについて、教える側も学生も、もう少し考える必要がある。授業の目的を忘れて、評価方法だけにこだわることによって、抜け落ちる要素（たとえば、統合性のようなもの）が（人間は、手抜きをする動物なので）きっとあるのではないかと思うのである。

7．小沢担当クラスの教育実践

（1）授業の展開

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　グループ分け（テーマ別のグループ分け）
第 3 回　パソコンを借用しテーマを調査（発表者 2 名）
第 4 回　厚木市資料館の見学
第 5 回　発表（16 名）以上は木村クラスと合同で実施
第 6 回　関心のある内容の個人ごとの発表その 1
第 7 回　関心のある内容の個人ごとの発表その 2
第 8 回　テーマの絞り込みの検討その 1
第 9 回　テーマの絞り込みの検討その 2
第 10 回 テーマの絞り込みの検討その 3
第 11 回 テーマについてのアンケートの検討その 1
第 12 回 テーマについてのアンケートの検討その 2
第 13 回 発表会のプレゼン用 PPT の作成手順の検討
第 14 回 プレゼンテーションその 1
第 15 回 プレゼンテーションその 2

（2）研究テーマ

・デザインは災害の復興に役立てられるか～人と色の形の関係を調べ熊本地震の復興に役立てられるデザインとは何か？
・人間と犬～殺処分 0 は可能なのか？
・日本製品について～なぜ日本製品は国内だけでなく海外でも人気を得ているのか？
・健康と自転車～自転車はダイエットに効果的なのか？
・脳内の働きとホルモン分泌～ホルモンが身体に及ぼす作用とは？～
・進化してゆく映像媒体にも屈しない演劇の魅力とはなにか？
・リラックスできる場所～屋内？屋外？
・落語について～人を惹きつける話術とは？
・大震災への具体的な対策とは？～起こり得る二次災害とは？二次災害などへの対策とは？
・ディズニーの魅力～なぜ何度も行きたくなるのか？

（3）反省

第 1 回から 5 回まで、厚木市郷土資料館見学も含めて、木村クラスと合同で実施した。その後は、第 6 回から 15 回までは小沢クラスのみで実施した。まず第 1 回から 5 回までで、厚木市関連する興味や関心のある内容を探し出すワークにおいては、パソコンを使った検索で各学生がそれぞれに関心のあるテーマを調べ、各自 3 分程度での発表を行った。簡単な発表ではあったが、全員の前で厚木に関連のあるテーマを発表することは、テーマ探しのきっかけとなったといえる。個々の学生がどのような発表を行ったかについては木村の授業展開に記されている通りである。

次に、第 4 回で実施した厚木市郷土資料館への見学であるが、今年度から始めて実施した。この資料館では、2 階のフロアーに戦前の様々な生活用具等が展示されている。ここを主に学生は見学を行った。若者世代に属する学生においては、昔の人々の生活用具を見ても、すぐには興味関心がわきにくいといえる。見学前に係の方にお願いして概略の説明をしてもらい、見学後に必ず一つ自分が興味を持った展示物は何かそしてその理由を発表してもらう課題を実施するとアナウンスしてから、見学を行った。40 分程度の見学の後集合し、全体で輪になりひとりひとり何を面白いと思ったかの発表を行った。見学について、いかに学生に興味関心を持たせるか、そして、グローバル化する現在社会の中で大学のある厚木の歴史にいかに興味を持たせるかは、今後の課題である。

小沢担当クラスに分かれてからは、それぞれの学生がテーマの設定に苦慮した。趣味や興味のある者を発表しなさいといえば、できる。しかし、そのことと、厚木というローカルな地域と自分の興味関心を結びつけることが難しい。さらには、半期の四ヶ月の間にまとめられるテーマを設定することはさらに困難である。例えば、動物園の動物の生活の実態に興味があるという学生がいたが、動物園の観察が必要となり、本演習のテーマとしては相応しくないので、学生との議論の中で、ペットの処分についての実態をテーマとして変更することとなった。

また、今回は 10 名の学生を担当したが、今年は遅刻が多かった。全く遅刻が無い年度もあったので、学生によるものと考えられる。遅刻者がいると、議論が成立しないので、今後は、指導のあり方を工夫していきたい。

３．総合学習での学びを発達段階から捉える

１．総合学習における校種ごとにおける発達段階における検討

（１）総合学習の創設

「総合的学習の時間」いわゆる総合学習は、2002 年(平成 14 年)より小中高学校で、学習指導要領の改訂に伴って、設けられるようになった。「総合的な学習の時間は、変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとすることから、思考力・判断力・表現力等が求められる『知識基盤社会』の時代においてますます重要な役割を果たすものである。」とされ、「生きる力の育成を目指し、各学校が創意工夫を生かして、これまでの教科の枠を超えた学習ができる時間」とされている[1)]。

その要点をまとめると、第一に、地域・学校・子どもの実態に応じて、各学校、各教師が創意工夫することができる、第二に、現代社会の特徴であり、各教科をまたがったテーマである、国際理解・情報化社会・環境重視・福祉健康の現代社会における問題についての内容を扱うことができることである。

この総合学習の創設に関わった寺島(2008)によれば、総合学習はそれ以前の詰め込み教育に対して設置されたものである[2)]。そこでは、詰め込み教育からゆとり教育へ転換、つまりは、現代社会の中で、生きる力を育み、生涯学習をめざす、公教育の大きな転換の一環として設置されたものとされる。

（２）総合学習からみえる学びの根本的問題

総合学習を、学ぶということを根本から考えてみる。すると、子どもから大人になる過程で教育を受け学んでいくことにおいて、一方的に受け取るだけで留まってしまうことになってしまうとしたら、それは教育の失敗であるといえる。いかなる発達段階においても、社会の中で自立した大人として生きるためのものであり、その自ら学び自ら答えを探していくこと、言い換えれば、子ども自身が自分の持った疑問に対して答えを見つけていく学びの過程は、詰め込み教育と言われる中でも、例えば一斉授業の中でも、学び手の思考過程の中ではその内的な活動が行われていることが必要である。

第一に、学習者による自分自身の興味・関心に従ったテーマ設定、つまりは、「なぜか？どうしてか？」という問いの設定が不可欠である。これは与えられた教科におけるある単元における授業においても、受け身と言われる一斉授業においても、頭の中で思考において問いかけが発生していることが、本当の学びであるといえる。つまり、学びとは本質的、根源的に主体的なものであるということができる。

次に、その問いかけに対して、答えを求め追求していく過程つまりは、方法論の選択の問題である。各学問分野さらには各教科においては、例えば自然科学、社会科学、人文科学という各分野において、それぞれの方法論を持っている。つまりは、諸科学という学問領域においては、それぞれが追求するテーマを持ち、さらにはその根底に、それぞれのテーマを追求する方法論を持っているのである。すると、各学問の修得には、内容と共に、各学問の方法論の修得も含まれるのである。

この二つの問題、学び手自身によるテーマ設定と方法論の選択が、いかなる教育における学習においても、自立した大人を目指して学ぶ過程においては必須のものであると考えることができる。このことは、総合学習においても、同様であるといえる。

（３）小中高大という各校種での総合学習におけるテーマ設定と方法論の選択という課題

①学び手からの主体的な問い

例えば、小学校において、自由研究という夏休みの宿題が課されることがある。その際に、児童によっては、自由に自分の調べたいことを調べられると聞いて、「やったー！何でもいいんだ！楽しみだなあ。何を調べようかなあ？」と思える子どももいれば、「えー？どうしたらいいんだろう。調べたいものなんてないよ。先生がこれ調べろって言ってくれればいいのに。」と思える子どももいるだろう。

デシの言うところに従えば、本来学びは、内発的なものである[3)]。つまり、報酬をめざしその獲得を目的とした外発的動機付けに基づくのではなく、自分の興味関心に基づいた内発的な動機付けに基づく学びこそが、学びの本質であるといえる。そこで、テーマ設定における、自分で選ぶ時点において、「面白いなあ」という内発的動機付けに基づいて向かっているかどうかが問題となっているといえる。

②小学校における総合的学習においてのテーマ設定および方法論の選択

さて、小学校における総合的学習においてのテーマ設定および方法論の選択においては、児童期という発達段階に即したものとなるといえる。つまり、児童期という発達段階において、その子どもにとって興味関心があるテーマが選択されることになるといえる。発達心理学におけるピアジェによる認識の発達段階説によると、児童期はピアジェによれば具体的操作期に当たる[4)]。この時期は、簡略化していえば、対象に対して具体的に数え、測定することが認識においてできるようになり、言い換えれば、具体的に測定することでこの世界とは何かを認識することができる時期である。それ以前の感覚運動期や前操作期における、身体やイメージにおいて世界を認識することも、引き続いてもちいているといえる。

このような認識の発達段階にある児童においては、テーマ設定や方法論の選択においても、具体的に測定することを選択することが可能となる。例えば、自分の家に近い駅

やバス停でどれくらいの人がある駅で電車に乗るのかというテーマを設定することができ、具体的に観察して数えるという方法論が選択できるようになる。つまり、方法論においてもシンプルに個数や人数を数え、距離等々を測定することが可能となるといえる。こうして、児童期に該当する小学校の総合学習においては、より生活に根ざした具体的なテーマを設定することが可能となり、その方法論においても具体的な測定という作業、例えば記述統計を扱うことが可能となるといえる。

③中学校における総合的学習においてのテーマ設定および方法論の選択

中学校における総合的学習においてのテーマ設定および方法論の選択においては、青年期前期という発達段階に即したものとなるといえる。つまり、青年期前期という発達段階においてその生徒にとって興味関心があるテーマが選択されることになるといえる。

先に示したピアジェによる認識の発達段階説によると、児童期以降は成人期とされるがピアジェによれば形式的操作期に当たる[4)]。この時期は、簡略化して言えば、対象に対して抽象的な概念を扱うことが認識においてできるようになり、言い換えれば、抽象的概念でこの世界を捉えることができるようになる。例えば、数学のおける文字式も扱うことが可能となるといえる。また、生活における幸福とか、善さとか、共生というような人文科学や社会科学における概念も、生活に根ざす範囲において扱うことが可能となるといえる。

④高等学校における総合的学習においてのテーマ設定および方法論の選択

高等学校における総合的学習においてのテーマ設定および方法論の選択においては、青年期中期という発達段階に即したものとなるといえる。つまり、青年期中期という発達段階においてその生徒にとって興味関心があるテーマが選択されることになるといえる。先に示したピアジェによる認識の発達段階説によると、青年期中期は成人期以降に相当するので、中学校時代と同じく、抽象的な概念をより高度に扱えるようになるといえる。特に、方法論における記述統計も例えば相関も扱えるようになるといえる。

また、プラトンにおける哲学のテーマである、真善美についてのよりよく生きるという人類において普遍的な概念についても扱えることが可能となるといえる。

⑤大学における総合的学習においてのテーマ設定および方法論の選択

大学生における総合的学習においてのテーマ設定および方法論の選択においては、これまでのピアジェの認知発達段階で言うところのすべての世界を捉える、世界認識の方法を用いることができるといえる。つまり、身体、イメージ、具体的測定、抽象概念のすべてをより高度に用いることが可能となる。そして、人類の文化の産物である各学問領域の成果を用いることができるといえる。つまりは、卒業論文の前段階のレベルにまで、到達することが可能となる。

また、二十歳となり大学を卒業後は確実に社会人となるのであるから、現在社会が抱える様々な社会問題についても追求することが可能となる。特に大学生は青年期後期に相当し、エリクソンの心理社会的発達段階説に従えば、青年期の心理社会的危機であるアイデンティティ対アイデンティティ拡散というアイデンティティ危機を迎える時期である[5)]。学生によっては、社会の中でいかに生きるかを問いかけ、自分とは何かを問いかける葛藤を持つ者もいる。社会の中でいかに生きるかという問題から、テーマを探し設定していくことが可能となる。

グローバリズムが席巻しつつある現代社会において、個人として生きる場所は常にある地域というローカリズムがあることを避けることができない中で、どこでいかに生きるかという問題は、アイデンティティ危機に陥らない学生にとっても重要な問題であるといえる。その中で、自然科学、社会科学、人文科学の各領域において、自らの学生の立場で社会においていかに生きるかに関わる問題に直面することで、テーマを探し設定することが可能となる。

４．小中高大の各校種での総合演習指導の留意点

（１）教職課程での学生への指導

では、教師として指導する側にたった場合において、総合学習における指導の留意点について検討する。そして、小学校、中学校、高等学校、大学という校種においては、発達段階において捉えると、児童期、青年期前期、青年期中期、青年期後期にそれぞれ当たると捉えることができる。このそれぞれの発達段階に位置する、児童、生徒、学生に対して指導する教師として、どのような点に留意して指導に当たったらよいかを以下にまとめてみる。

特に、大学における教職課程において総合学習の授業を実施する際には、学生自身は自らの総合学習の経験から、自らが教師となった際に、児童・生徒に対して、どのように指導したらよいかについても理解し、実際の児童ができるようになる必要がある。

（２）テーマ設定について

先に、それぞれの発達段階における特徴を検討したように、テーマ設定においては、学び手自身の生活の中から生じた問題に関わるものであることが、内発的動機付けに基づく学びという点から重要である。自らに関わる問題をテーマとすることによって、やらされている勉強から、自ら進んで取り組む主体的な学びとなっていくものといえる。この点から、指導する教師としては、児童、生徒、学生にとっての生活の中から生じたテーマとなっているかどうかを確認しつつ、テーマ設定についてのアドバイスを行うことが重要となる。単に、流行っているから、友人が選んだテーマだから、とにかく何でもいいから、ちょっとだけ

気になったから、というような、いわゆる軽い気持ちで選んだテーマからそれぞれの発達段階における可能性において、深めていく作業をしていく必要があり、そのサポートをする教師の指導の役割に留意しておく必要がある。

また、小・中・高等学校においては、今まで何を学んできており、これから何を学んでいくのか、という既習事項と未履修事項を、学習指導要領を参照しつつ把握しておくことも、教師としては必要となる。未履修事項に関わる内容については、特に、児童生徒が今いる発達段階において、理解可能なことか、難しいことかの判断を教師が行い、児童生徒にとって理解可能であり、テーマとして追求することが可能な範囲で、テーマを落とし込む指導が必要となる。

（３）方法論の選択について

例えば、自然科学・社会科学・人文科学に大まかに区分した学問領域において、各学問分野ではそれぞれの方法論を持つ。実験、観察、調査、文献等の方法論によって各専門分野の研究は行われている。さらに、実験、観察、調査、文献等の方法論の各分野によって、細分化されていく。小中高大における総合学習における方法論についても、基本的には、各学問分野の方法論に則って行われる。つまり、指導する側が児童生徒学生という学び手に対して、その発達段階にある学び手はいかなる方法論のレベルを取ったらいいかの判断をすることなる。例えば、同じ文献研究という方法論においても、小学生が行える範囲の文献と、中学生、高校生、大学生のそれぞれが読み理解できる範囲の文献を指導者が振り分ける必要がある。

同様に、実験、観察、調査、文献等の方法論においても、小学生、中学生、高校生、大学生においてはそれぞれいかなる範囲の方法論を採ることが可能であるかについて、指導者として留意しておくことが必要である。つまり、社会の中で大人として自立することを根底に目指しながらも、各発達段階において用いることができる専門用語の範囲が異なり、そのテーマを追求する方法論も異なってくる。このように、方法論においても選択できる方法論も異なってくることに留意し、アドバイスや指導も異なってくることに留意する。

（４）児童・生徒・学生自身の個性を見極めた指導

ヴィゴツキーは、発達の最近接領域を提唱し、子ども自身がある発達段階にいてもその発達段階の範囲を超えた内容でも、他者である教師に援助を受けながら、理解することができることを「子どもが今日、大人の助けを受けてできることを、明日には、彼は自主的にできるようになる」と象徴的に述べている[6)]。この見方を取り入れば、その児童・生徒・学生においていかなるアドバイスや指導を行えば、その学び手がいる発達段階以上の内容に進んでいけるかを、教師は留意することが重要であるといえる。最終的には、いかなる児童も、生徒となり、学生となり、また社会に出て大人となっていくのであるから、それぞれの個性を持つ学び手において、この学び手ならば一段上の内容を理解できる可能性を感じ取ったならば、教師としては、その一段上の内容を追究できるような示唆を与える機会を常に待っている必要があるといえる。

また、それぞれ個性を持った、児童・生徒・学生であるので、同じ発達段階にいるといっても、誰もが一応で同じではない。よって、それぞれの、児童・生徒・学生が、その人間としての成長の過程にあり、最終的には社会に出て大人として生きていく際に、今の段階で何が必要であるかを考慮し、そのサポートをすることに配慮しながら、総合演習の指導を行うことに留意することが重要であるといえる。

1) 文科省 HP　総合的な学習の時間 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/main14_a2.htm　2017.3.27 確認
2) さらばゆとり教育　寺脇進　光文社　2008
3) 内発的動機づけ　エドワード・L．デシ　安藤延男訳　誠信書房 1980
4) 発生的認識論　J.ピアジェ滝沢武久訳　白水社　1972
5) アイデンティティとライフサイクル　E.H. Erikson 西平直・中島由恵訳　誠信書房　2011
6) 発達の最近接領域の理論　ヴィゴツキー 土井捷三神谷栄司訳　三学出版 2003

５．学生の「総合力」形成の意義と今後の課題

―　主体的・対話的で深い学びの成立可能性

（１）現代における人間の「総合力」について

本年度は「あつぎアカデミックプロジェクト演習（教職課程の単位としては「総合演習」）」開設の一年目である。既述したようにこれは、学生が主体的に「あつぎ」という場所と関わらせて探究することを目指している。

ここ数年に限定してみても、我々が暮らすこの国には大きな自然的・社会的変化や多様な外圧が散見される。想定外として対面しなければならない問題や課題が生まれている。少子高齢化で総人口が減少し始めたこと、労働力の確保、それに対応した社会保障体系やライフラインの再構築、或いは、科学技術や人工知能の深化とそれによる産業形態や労働形態の変化、或いは甚大な被害をもたらす自然災害等、様々な課題や問題が生起しているのである。また、グローバル化がこの現象にさらに諸影響を及ぼしている。昨年の新アメリカ大統領の誕生や英国の EU 離脱は、想定外の現象の出現である。それまでの理解や知識では把握不十分な現象として出現している。これへの対抗・対応を喫緊課題として諸現象に正面から取り組むことが要請されている。さらには、我が国のおよび諸外国の未来にむけての社会システムや諸資源の安定的な確保と環境の安全化・安定化いう「持続可能性」の方途を探求されることも要請されている。自分さえよければいい、自分の国さえよければいい、という濃密な中心性だけで了とすることに倫

理的な自省は問われていないのかどうか、皆自問しているのである。

そういう時代の変化のなかで本学は厚木市に立地し、この地域に根ざして学生たちとともに日々歩んでいる。この科目は、したがって、社会・自然の変化や想定外の課題や問題を、この地域の生活を通してどのように見つめ自分なりに「問い」を設定し追究していくかが大切になってくる。グローバルとローカルの交差点として、この「あつぎ」における諸問題や興味・関心を自分なりに設定し追究していくことが目指されている。つまり「他人事」としてではなく「自分事」として当事者意識を形成することが要点となっているのである。そしてこの探究活動が、いわゆる生きた知識や生きたスキルを習得していくことにもなるという教育的目的をもっているのである。

本学のこの当該科目に類した科目を開設している大学は全国にいくつも見いだせる。すでにその先行成果を辿り学ぶことが可能となっている。

例えば東京大学には「大人になるためのリベラルアーツ」という演習科目が教養科目として開設されている。『大人になるためのリベラルアーツ』としてその成果と実践分析を著している[1)]。

テーマは多様だ。コピペ、グローバル人材、福島原発事故、芸術作品と客観的価値、代理出産、飢えた子と文学、真理は一つか、国民はすべてを知る権利を有するか、学問の社会への責任、人を絶対に殺してはいけないか、議論と合意、差異の乗り越え、である。実践した藤垣教授は言う。「教養とは知識の量ではなく、いついかなるときにでも自らの知識を総動員して他者に説明でき、的確な判断を下せる能力のことである」と述べている。つまり、自立した自由な人格であるための学芸のことであるという[2)]。

この教養を「往復する力」として相対してみると視界はさらに拡がるという。語学をめぐっては外国語という言語を通して世界把握の違いを学ぶという自国と他国との往復であり、歴史的文脈で現代社会を理解するという過去と現在の往復であり、古典もまた過去と現在の往復である。学問間の往復、分野間の往復は、多様なコミュニティーへの往復である。これらの往復する力により、独立した自由な人格は、自分自身を相対化し、既往の枠組みから解放される可能性をもつ。この力の発揮する可能性は、藤垣によれば、日々の具体と抽象の往復でもあり、今後は企業経営にも必須であるし、成熟した市民育成にもつながるという。色々な枠組みやルールに従属するだけではなく、市民としての選択の場面での対応としてその応用力が発揮されるという。従って、他人事としてではなく、当事者として様々に調べそして他者に伝え協力を得ていく場面がさらに開拓されていくだろう。

昨今の我々の日々の暮らしにおいては「ガラパゴス化」の安住と安定を揺さぶる兆候と気配を確かに感じている。統合や安定がいつも保障されているわけではなく、分断や孤立を招来することもありえる。生活の条件・生（life）の条件や属性によってだれでもがその不安定に遭遇することはありえる。「自分事」として受け止め、そして往復する力で開拓することが求められているのである。

「あつぎアカデミックプロジェクト演習」は、このような観点から再度検討した時に、次の三つのことを授業者に改めて認識していくことが求められていると考えられる。

Ⅰ. 総合力の形成：いつの時代も教育とは「総合力」形成であることは語られてきた。そして同時に、時代や社会の要請や影響を受けたり人々の理念や志向に相関しながら、力点の置かれ方は異なっていた。評価方法の一つの現れとしての入試もまたその反映であった。そしていま、この「総合力」の代表的な表現は、次のように描出されている。つまり、文部科学省の高大接続システム改革会議の最終報告に描出されている。①十分な知識・技能 ②それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力 ③これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度。この三側面を有した力である。この「総合力」を形成することが求められている。

Ⅱ. 多様性ということ：あらゆる場面で価値観の多様化や諸研究の発展によって過去の遺産や文化や習慣・慣習やルールやシステムが相対化されている。また、独自の属性をもった人々の多様性を排斥する保守的既得性に固執したガラパゴス化ではなく、往復と相対化による寛容と相互承認の力や教養、あるいは、人間関係構築としての対人関係力の形成が求められている。

Ⅲ. 「即戦力」ということの真意を問い直すこと：諸変化と諸発展の中で、「役立ち」とはなにかを今、改めて多くの人々は問うている。生産性からの観点、競争的力学の観点から問うている。しかし、諸種の格差の拡大の中で自由原理と平等原理をどのように基礎づけていくかが難しい課題となっている。諸外国との対外性にも社会の持続性としての将来性にも「合理的な配慮」をして、さらには諸条件が過酷な弱者といわれる人と有利な人との自由と平等への「合理的な配慮」を追求していく力。この力の形成が求められている。「即戦力」形成にとってこの配慮は、力の錬磨とは何かを深く洞察することになるであろうし、その洞察は持続可能性の方途を創出することにもつながっていくのではないだろうか。

「あつぎアカデミックプロジェクト演習」は、本学の授業の一つにすぎない科目ではあるが、上記の三点を自覚化していくことが大切である。

（2）現代に生きる学生が「考える」授業とは　―「哲学する」ということの意義と本授業

竹田青嗣は『考える技術としての哲学』において、近代哲学者たちが洞察した果てに導き出した「哲学とは何か」の「答え」を以下の三つに端的に要約している。

第一、客観存在、事実それ自体というものは存在しない。したがって絶対的な客観認識、真理それ自体も存在しない。そのことは証明できる。

第二、しかし一切の認識が相対的なのではない。認識の

本質とは、絶対的でも相対的でもなく、「関心―目的相関的」である（設定された関心、目的に応じて、共通認識は可能である）。

第三、認識の領域は、「事実」の領域と「本質」（価値）の領域に区分される。事実の領域では厳密な客観認識が成立しうる。本質（価値）の領域では厳密な客観認識は成立しない。しかし、ここでは「構造の共通性」を、すなわち“共通了解”を取り出すことはできる[3)]。

竹田が言うように、自然世界については客観認識は取り出せる。しかし、価値観、倫理観、審美観では、認識の厳密な一致は成立しない。異なった価値観を持つ人間（共同体）同士の間での「共通了解」を成立させ共存を導くということである。竹田はこれを「信念対立を克服するための考え方の原理」と呼んでいる。　我々が生きそして学生が生きる現代社会は、多様な価値、多様な幸福を求める自由を相互に承認し合うという原理の上に立っている。信念対立はいろいろな次元で存在する。したがって「哲学の方法」とは、そのような対立場面で「いかに根本的に考えるかを教える方法」である[4)]。諍いや対立抗争の原理的な解決を提示できるのである。

確かに、信念対立は多様に存在しているのである。これについて「あつぎ」での日々の暮らしにおいて無自覚があるとすれば、それはむしろ好ましくない。「哲学の方法」とは、そのような対立場面で人間社会における善や正義をめぐる市民としての行動が、哲学をすることと不可分である。誰でもが、自由の相互承認を創出する哲学が求められている。先述の「総合力」は、この哲学する力と不可分であると理解したい。

主体的に「考える生徒」を教育していくことが各学校種に求められている。東洋大学京北高等学校の石川直実教諭は生徒が「考える授業」として「哲学の授業」を開発している。現代社会においてほんとうに考える生徒の育成をめざした授業実践である。問いを立て意見交換の交流を大事にしているという。その基盤には以下の教育的志向がある。すなわち「世の中が変化している今だから俯瞰して見る目を養いたい。空気に流されず、なぜ、という問いを立てて考える人間になってほしい」と述べている。これは大学教育においても参考になる視点である[5)]。

（３）本科目において授業者に問われる指導力について

主体的・対話的で深い学びとしてのＡＬ（アクティブラーニング）の範型としてのこの「あつぎアカデミックプロジェクト演習」は、大学版「総合的な学習の時間」といえる。我々はこの授業を実践しながら中学校教師や高校教師の側に立って見つめ直すことがある。すると、学習者が「何ができるようになるか」というコンテンシー形成の責任が問われていることに気づく。したがってこの学習は授業者に独自の指導力が問われていることにも気づくのである。その点について例えば、広田照幸は次のように指摘している。すなわち、「教員の側から見ると、具体的な何かの学習を通してメタレベルの目標を追求することになるから、かなり高度な技術が必要となります。しかも、具体的な学習内容と身につくスキルとの間のつながりが不確定であるなど、教育学的に難しい問題をはらんでいます」と述べている。課題解決能力の育成を志向していても、実際には身近な問題の些末な知識ばかりが子ども達に残っていくという心配もあるというのである[6)]。本学での本科目実践においても、これは刺激的な指摘であり、さらなる改革を目指していくものである。

或る工業高校教師が「即戦力」についてその本質を次のように語っている。即戦力＝スキルではない。それを構成する一要素にすぎないという。「スキル ＋ 意欲・かまえ ＋ 段取り ＋ まわりへの配慮・協働 ＝即戦力」であるという。そして工業高校での実習の狙いは、現場でスキルを活用できる基盤となるものづくりの精神や力を育てるところにある、というのである。「役立ち」の捉え方をめぐって現場をよく見ているからこそ提示できた言説である[7)]。

工業教育のこの提示からして、本学における本科目の授業において「あつぎ」という現場をよくみつめて、そして、グローバルとローカルの交差の状況や課題や問題をつかみ取り、追究の成果を自分なりに表現し提案ができる力を培うことが求められていると考えられる。

前章までの各担当者による本科目実践分析から示されているように、学生たちの興味・関心や追究課題は、現代社会におけるグローバルとローカルの交差点の場所に立ち、生起してきたものである。そして、学生の熱意の温度差や思考の深さの差はあることも事実である。繰り返し自問しつづけてきたテーマをもっている学生もいれば、当事者としてずっと違和感を持ち続けてきた対象を抱えた学生もいれば、社会的不正や格差や善について考えてきた学生もいれば、受講登録後に追究テーマの在処を改めて探した学生もいた。しかし、少なくとも自分自身が何を追究したいのかという点からすれば、自分自身に向かい合い、そして社会や他者に向かい合ったという事柄自体は成立していた。

本科目で主体的に学びつづける過程、他者との共同的な相互作用の過程は、主体的・対話的で深い学びとしてのＡＬ（アクティブラーニング）の範型として受け止めてよいのではないだろうか。既往既存のシステム体系やルール体系を相対化し新たなそれらを創出するための萌芽を見いだせるのではないだろうか。

「総合力」を培う授業改革はすべての授業者の関心事項になっている。「自分さえよければいい」「自分たちの明日さえあればいい」を相対化しこの社会の未来への持続可能性や諸条件の揃っていないいわゆる「弱者」と自分自身の生き方とを重ね合わせ関連づける思考をしてそれを態度化していく力の形成を求められている。本科目はそのような方向で授業改革を工夫している。また、この授業を通して培った力が、将来教職に就く学生・教育実習を体験する学生にとっても教育実践校での後ろ盾になることを我々は目指している。そのために本科目の授業へ取り組む受講

者の真摯な態度や真剣な学びの姿勢への指導もさらに工夫を求められている。そのための評価方法もさらに改善していきたい。

（註）

１）石井洋二郎、藤恒裕子、大人になるためのリベラルアーツ、東京大学出版会、2016、参照
２）日本経済新聞　朝刊、2016.5.2
３）竹田青嗣、『考える技術としての哲学』、「シンク」No.5 東洋経済新聞社、2014、p.71
４）同上、p.72
５）『AERA』、朝日新聞出版、2017.3.27 、参照
６）『世界』No.892、岩波書店、2017、p.48
７）『内外教育』第 6566 号、時事通信社、2017.3.3、参照